

閉会挨拶

東京大学 副学長・大学総合教育研究センター長

吉見 俊哉

東京大学副学長、大学総合教育研究センター長の吉見でございます。主催者を代表して、閉会のご挨拶をさせていただきます。

本日は「高等教育の費用負担と学生支援」という大変重要なテーマについて長時間に渡りご議論いただき、また、会場の皆様には最後までお話をお聞きいただき、本当にありがとうございますでした。

特に、ニコラス・バー先生、ローラ・パーナ先生、そして魏建国先生には遠方よりおいでいただき、私ども日本の状況をお聞きいただきながら、大変熱心にお話をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

今日、大学は、長期的あるいは短期的な、大きな危機や転換点に直面していると感じています。長期的な課題としては、いわゆるグローバル化、そしてデジタル情報化が進んでいます。さらに、とりわけ日本の場合には少子高齢化という大きな波が襲ってきております。これらの波の中で、私たちは大学の再定義、つまり大学とは何か、大学は社会との間でどのような関係を持つべきか、ということについて、改めて根本から考え直さなければいけない時期に来ているのだと思います。

若干私自身の考えになってしまいますが、私はいろいろなところで、大学は人生の通過儀礼から、むしろキャリアやビジョンの転換期にならなければいけないのだと申し上げて参りました。

人生の通過儀礼とは、中学があり、高校があり、大学があり、社会があるという、18歳の多くの若者たちが大学に入り、やがて社会人になってくるというのが当たり前であるような大学の在り方です。こうした在り方から、キャリアやビジョンの転換期になっていくということとは、ざっくり言えば、やがて多くの人は人生で3回大学に入るような、そして大学に入ることによってビジョンやキャリアを転換していくことが可能になるような機関になっていくべきだということです。3回というのは、18歳と30代前半と60前後です。なぜその3回なのかという説明はここでは省略します。

このような新しい仕組みに向かって大学が徐々に変化していくとするならば、大学の学生の在り方は、今より遙かに多様化します。そのような多様な学生に対してどのような教育が提供されるべきなのか、そしてどのような支援が提供されるべきなのか、また、そこで学ぶ者たちはどのような負担や努力をしなければならなくなっていくのか、ということについて、まだ答えは出ていないと思います。

短期的な、そして喫緊の課題というのは、言うまでもございません。多くの大学が国際競争にさらされています。そして教育の質の向上、つまり学んだことがはっきりアウトプットとして、あるいはアウトカムとして出てくるような仕組みに教育を高度化していかなければならないという圧力に私たちはさらされています。



その一方で、日本の、特に国立大学はどんどん運営費交付金は減らされていますし、財政は厳しくなる一方です。しかし、なかなか産業界等々からの寄附が今の仕組みでは十分集まるようになっていません。さらに、家庭からのサポートも非常に厳しくなってきました。つまり、財政的、経済的にどんどん厳しくなるという条件の中で、さらに教育の質を高度化しなければいけないという、非常に厳しい状況に置かれており、どうやってブレイクスルーを見つけていくかという課題に直面しているのだと思います。

長期的には大学が再定義されていく、あるいはどのように再定義されていくのかということ、そして短期的にはこのような質の向上、あるいは教育の質をめぐる国際競争と財政的な極めて厳しい状況をどうやって折り合いをつけていくのかということ、これら全ての間に一挙に答えろと、とりわけ日本の大学人は言われているのだと思います。

そうした中で、本日のシンポジウムのテーマである学生支援と費用負担、このテーマは中核的なテーマだと思います。

そもそも誰が学生なのか、そして誰が学ぶ主体なのか、また、学生を支える者は一体誰なのかという問いがあり、この問いに答えていく。恐らく多くの示唆的な議論が本日になされてきたのだと思っております。

私が思いますのは、大学は最終的には学生のものだという事です。学生には高齢の、60歳前後の人もいるでしょうし、30代前半の人もいるでしょうし、20歳前後の人もいるでしょう。いろいろな国籍の学生がいるでしょうし、文化的な多様性もあるでしょう。しかし、いずれにせよ、大学の主体は学生であり、そして学生がより高度に学ぶ場をどのように未来に向けて作っていくのかということが、私たち大学人に課せられている課題なのだと思います。

このような課題のまさに中核に、本日議論をしていただいた学生たちの負担の問題、そして学生たちへの支援の問題、つまりまさに経済の問題というのがあるのだと考えております。

この問題を解決していくときに、学生の多様化という面では、恐らく欧米の方が遙かに日本より先に行っておりますから、アメリカやヨーロッパのいろいろな例から学びながら、また私たち自身もこの問いを共有して、未来に向けて大学が更に発展していくような道を見つけていきたいと考えている次第です。

東京大学大学総合教育研究センターは、力も決して強くない、小さなセンターではありますが、このようなシンポジウムを催しながら、多くの方から今後ともご支援を頂いて、共に考え、共に未来を見つけていく努力をして参りたいと存じます。

最後になりましたが、本日まで登壇いただいたパネリストの先生方、そして会場にお集まりの方々に改めて私ども主催者から御礼を申し上げ、私の閉会の辞とさせていただきます。ありがとうございました。